

学生生活と大学セミナー・ハウス

——生徒が学生になるために——

飯 田 宗 一 郎

セミナーハウスとは何をするところであるか。学生にとって、セミナーハウスが「かけがえのない場」となっているのはなぜか。昭和五十二年十二月号の文芸春秋が「現代の松下村塾」という座談会を特集し、大学セミナーハウスを紹介された理由は何か。私が昭和五十三年二月二十日の日本経済新聞に書いた「大学再考」はそのような問いに対する回答のようなものである。そして昭和五十三年一月二十五日に東京工業大学江藤淳教授がNHKラジオ第一放送で「もう一つの塾」と題して同志社と私のことにふれながら大学セミナーハウスを紹介されたことは、私の「大学再考」論に対する証言になったらしい。

戦後、新制大学制度になって、国公私立の大学数が急激に増加し、量的な膨脹と質的な向上とを、どう結びつけるかが、大学教育に課せられた重要な課題となった。大體、日本の大学というのは、英米のような Residential College の制度をとっていない。大学とは一つの共同体であって、ただ学問をするところだけではない。全人的な人間の触れ合いの場であるべきである。

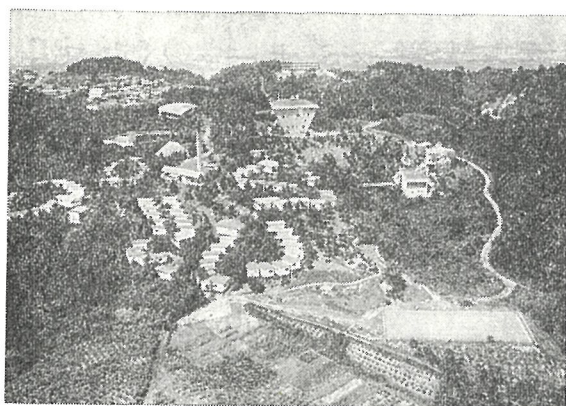
旧制高校には、こういう考え方があった。現在でも旧卒業生が当時のよき時代と寮生活をなつかしく思うのはそのためである。わが同志社も創立当初の教育は寄宿舎制度が中心であった。同志社五十年史は、一章を設けて寄宿舎の必要を次のように書いている。それは、いままなお生きている真理である。

「同志社の高調力説する精神教育は只教室に於ける講義のみでは充分達せられず、どうしても教師と生徒、又生徒同志の人格と人格との接触又切磋琢磨によらねばならなかった。故に同志社の主義精神を貫徹せんと欲すれば勢い之を寄宿舎に待たねばならぬ。」

私は体験を通して、一つの結論に達した。その体験の大学論を有形なものにしようとしたのがセミナーハウスの構想である。私は周知のように職業上は一人の大学職員であった。そして専門的知識などは何ら持ち合わせていなかった。観念や遊戯を好まない現実主義者である。理念を現実化するために、先ず新しい言葉を創った。寄宿舎でもなく、寮でもない新しい形式の合

宿施設であることをいい現わすためには新語が必要である。その新語がセミナーハウスである。

このようなセミナーハウスの構想を論理化し、普遍化するために、昭和三十七年九月、「大学と人間」を公刊した。十人の執



大学セミナー・ハウス全景

筆者の中に東京大学総長茅誠司、広島大学学長森戸辰男、東京工業大学助教授永井道雄の諸氏がおられたことを思うと、その出发点において、すばらしい協力者をさぐり当てた意義は極めて大きいといわなければならぬ。私学人であり、同志社人である私が、私学の外側でこのような学者達に出会ったことを幸運として、いまでも感謝している。この「大学と人間」とを指針として、ただ一筋に歩んで来たのが、大学セミナーハウス十三年の歴史である。

現在、わが国の大学教育がマスプロ化し、その弊害が問われているのは、教育の中に生活がないからである。マンモス教室は教習所である。百冊の本を一人で読む以上に、一冊の本を読んで共に話し合うことが教育であるということをとらえ直したいものである。たとえ三日でも五日でもよいから教師と学生が膝につき合わせて、一つの飯を食べながら勉強することを学生生活の中にとり入れるならば、大学の環境は、そして学生の気風は変化するに違いない。

この原稿を書いている九月十日には次の

ような十三のグループが在泊している。大学の格差などは微塵もない。国公私を分ける垣根もない。

東京大学(2) 法政大学(2) 日本大学(2) 青山学院大学(2) 津田塾大学(2) 成城大学、上智大学、相模女子大学(計一九〇名)

大学は生徒 *pupil* が学生 *student* に変わるところである。現在の大学は果して生徒が「学生になる」ような環境になっているであろうか。教室に出て先生の講義を覚えるだけでは生徒である。曲りなりにも自分の問題意識をもって *Study* する自主性を持たなければ学生と呼ぶわけにはいかな

い。
「学生である」ことを体験させるのが、セミナーハウスであるといつては誇張であろうか。

(昭和六年専門学校高等商業部卒、
大学セミナー・ハウス館長)

現代学生と

セミナーハウス

平 田 哲

ひさしぶりに、同志社の構内を歩いてみた。変わったなア……というのが実感。人が多い。色とりどりの服装。例のタテカンというやつ。これでも日本語なのかと慨嘆しつつ立ち止って読む。同志社が奇妙な人種に乘っ取られたかと首をひねった。

わたしが二十数年前、入学の感激と共に身につけたあの黒い角帽、詰め襟の学生服は、どこにいったのでしょうか！

「大学生てのは、人生の休暇だよ。みんな受験地獄で、がんじがらめになっていたんだろう。いまこそ、自分を取戻して自由になったんだ。この時間を楽しまなくちゃあね。どうせ卒業すれば、就職だ、結婚だ、またがんじがらめに管理されるんだから。いまが最高の時間なんだぜ」

これは、新入生のオリエンテーションで、先輩が語っていた言葉である。大学が、学問の場としてよりも何か息抜きの場としてある感じは、いまの大学生に一般的な意識なのではなからうか。

もちろん、今の学生が、勉強もせずに遊んでばかりいるという意味ではない。学園紛争の垣塙のさなかにあった時代にくらべ

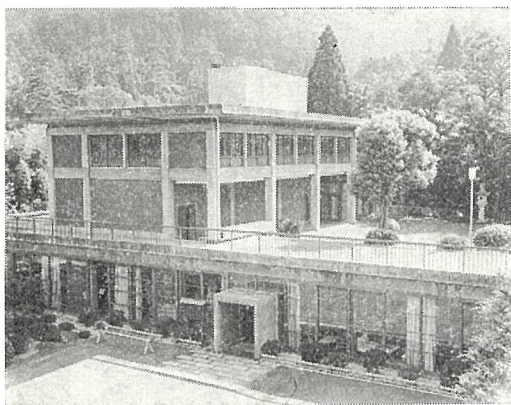
れば、はるかにおとなしく、よく勉強しているそうだ。勉強のかたわら、学園生活を余裕をもって楽しんでいる風に見える。明るく派手な青春がそこにある。享樂的で刹那主義的で自己充足的な若者の群が、巨大化したキャンパスの中で砂浜の石ころのように、あちらへ流され、こちらへかたまり、「石ころ集団」として、このところのかわりと真実の対話を失ってきている。

現代社会は、「手づまりの時代」あるいは「不確実性の時代」といわれ、科学技術の進歩にもかかわらず、未来に対する不安が人々の中に存している。

人間が人間らしく生きるとはどういうのか。

何のために学問するのか。
生きる意味とは。

これらの命題が、学生諸君の深い価値観と結びついて追求されるところに、キャンパスの石ころ集団は、ひとつひとつ生命をもったものに変身してゆくのではなからうか。大学生活を単なる青春の散歩道として



関西セミナー・ハウス

通過してはならない。人間同志のほんとうのつき合い、こころの通う対話のできる仲間づくりこそ、学生生活の収穫である筈だし、如何に生きるかを探りつつ、人として主体的に生きるすべを学び、自立を果してゆかなくてはならない年頃の筈である。むかし、村落共同体では、男子は或る

年令に達すると、「若衆宿」に送りこまれた。つまり、青年独自の行動様式を保持する場であり、独特な社会訓練の場でもあり、そこで話し合い自己修養し社会行動を展開させた。若衆宿（寝宿・泊り宿・若い者部屋等々と呼ぶ地方もあった）の生活は、固い団結と厳しい訓練をともなっていた。大抵昼間は各自の家の仕事に従事しており、夕食を済ませてから宿に来る。夜なべ仕事（農村ではわら仕事、漁村では網のつくろいなど）をしたり、力くらべや雑談をして時を過す。ここで女性観や結婚への心構えなどが養われたりした。

関西セミナーハウスは、新しい形態の「若衆宿」として、学生諸君に利用してもらいたい。対話の場として、自己鍛錬の場として、おおいに活用していただきたい。

ブラジルの教育哲学者パウロ・フレリィは次のように述べている。

「対話は人と人との出会いである。対話は人間に対する深い関心と信頼を必要としている。人間には、つくり出す力が宿されており、失敗してもなお立ちあがって再生し、人間性の回復へと向う力が存している

ことを確信することが必要である。」
叡山をはるかに仰ぎ見つつ、静かに語り合い、自己を見つめなおすひとときを、愛する後輩諸君に提供したいとねがうものがある。

（昭和三十年大学神学部卒、財団法人日本クリスチャンアカデミー・関西セミナーハウス所長）



同志社カレッジソングと

ウイリアム・メレル・ボーリス

一 柳米来留先生

西 邨 辰 三 郎

大正十五年の春、私はおおくの夢をい
いて、同志社大学の予科に入学すると、間
もなく、プリムローズクラブ（合併して、い
まのグリークラブ）に入部した。その時、い
ちばんはじめにもらった楽譜が、このカレ
ッジソングであった。同志社に入学したか
らには、なんでも人より早く歌いたいもの
だ、ともらったばかりの楽譜を大事に抱え
た私は、授業の合間合間に、当時予科の教
室だった有終館の石段をとりおるよう
にして、新緑も美しい御所に出かけた。砂利
の敷きつめられた広い道を、北から南に、

南から北へと、自分の足拍子に合わせて、
熱心に勉強した。いわば、自学自習のおか
げで、楽譜も分り、歌詞も暗誦できて、先
輩から褒めてもらったことを覚えている。
さて、この同志社カレッジソングは、米
国コロラド州より万里の波濤を蹴って、日
本にキリストの福音を伝えるために渡来、
近江ミッシェン（のち近江兄弟社と改名）を
創設された偉大なる米人ウイリアム・メレ
ル・ボーリス（のち日本に帰化されて「柳米来
留」先生によって、一九〇八年（明治四十
一年）創作されたのである。

賢くくて、快活で、いっしょうけんめい
で、発明的で、誰にでも好かれるメレル先
生が、時あたかも聖書を教える、というか
どで、滋賀県民の反対にあい、八幡商業学
校の教職を追放されて免職の異人とののし
られ、罵詈雑言を浴びておられた頃であ
る。しかし先生は、キリストの福音伝道の
ために、日本の琵琶湖畔に、命をすてた
い、と堅い決心をされた。そうして経済的
窮乏を神に委ねて、敢えて信仰の冒険を試
みられた。マタイによる福音書第六章三十
三節に、「まず神の国と神の義とを求めな
さい。そうすれば、これらのもの（衣食住
一切）は、すべて添えて与えられるであろ
う。」との神の言を確信され、これを証し
せんものと、近江八幡を本拠に、多方面の
活動を開始された。その第一歩が、京都三
条の Y・M・C・A の建築設計監督であ
って、八幡からたびたび京都に出られたそ
うである。

このカレッジソングが作られた顚末につ
いて、同志社社史史料編集所の故田中良一
氏は、かつて、「ワンパーパスの回顧」と
題したボーリス談話を発表されたことがあ

る。

ワンバークスの回顧

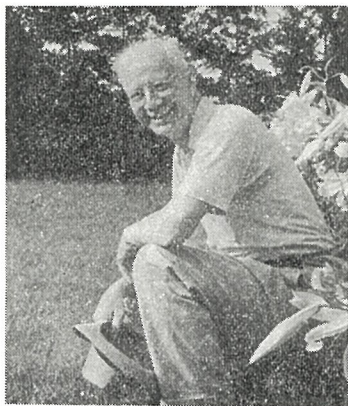
——同志社ソング作詞の事情——

ウイリアム・メレル・ボーリス談

〈同志社タイムス、昭和三十七年二月、二十八号所載〉

その要旨——

一九〇八年、明治四十一年、京都Y・M・C・A・の建築が始まり、自分が週三日、八幡から工事監督に來た。そのたびに同志社のロムバード邸に宿泊し、食事はデビス邸でお世話になった。そのとき、シド



輕井沢の夏のある日

ニー・ギュリッキ先生から、カレッジソングが必要であるから、君作れ、といわれ、ロムバード、ダニング両先生も賛成して大いに激励をうけた。

曲はもともと青年らしく元気に満ちたものをまず選び、「ラインの守り」にした。これはエール大学の校歌と同曲で、これにはカープ先生が賛成して下さった。

なお片桐哲教授は、「当時ギュリッキ先生から、エール大学の校歌集をもらった。それで同志社にも校歌がほしい、とわれわれが要望した。そんなことから、ギュリッキ先生がボーリス先生に依頼したのである。」といわれた。

右のような事情によって同志社カレッジソングは誕生したわけである。青年詩人のボーリスさんが、新島先生の高い教育理想に感激して、詩想を練っておられた有様が心眼に浮かぶのである。

同志社には、このほか湯浅吉郎、大中寅二先生による日本語の校歌や、北原白秋、山田耕作先生による大学歌などもあるが、やはりいちばんよく歌われるのは、このワンバークスではなからうか。それは新島・

ボーリス両先生の魂が、深く織り込まれている霊の歌にはかならないからである。選択された言葉は、韻をふくんで美しく、重厚で気品があり、聖書の言葉を枢軸として、国際精神に富んでいる。私達はこれを熱心に朗読してゆくと、同志社立学の精神に打たれ、同志社人としての誇りと喜びを感じる。私どもは、香里での礼拝の時間、時々全員をそろってこのワンバークスを歌うことにしているが、これが回を重ねて、正しく歌われれば歌われるほど、いつそ歌の厚みと深さを感じ得る。それは同志社に來て以來五十年間、歌いつづけてきた私の体験である。同志社の全学生・生徒・校友、同窓はもとより、父母の会でも大いに歌っていただきたいのである。特に正しい英語の発音を以てである。

ご承知のようにこの歌詞は、四節からなっているのであるが、実を言って四節全部を正しく歌うのは可成むづかしい。学校のクラブでは、大体一節二節を歌って來たのである。

ところが、一九五四年（昭和二十九年）の秋、ボーリス夫妻は、米国オハイオ州デ

イトンにある私の留学先へやって来た。同地には近江兄弟社のアメリカ支部があり、カール・バルカムという日本嵐風の写真の大家が、その責任者であった。バルカムさんは大喜びで、私を神学校の寮からひっぱり出し、ヴォーリズさんとのすき焼パーティーに誘ってくれた。そして実に愉快な夕食を共にした。その時ヴォーリズ夫妻もなかなかのご機嫌で、「西邸さん今でもぼくの作ったカレッジソングは同志社で歌っていますか、」との間に、私は時をうつさず「勿論歌っておりますよ、でも少し長いから大体は一番と二番ですましています」といった。すると先生は、「それなら一番と四番して下さい。ぼくは四番の最後にある『For God, For Doshisha and Brotherhood』が歌って欲しいなあ……」ということであった。私はその先生の熱のこもった話に感激して、帰国の上、学校にその旨を伝えたところ、その話は忽ち学内に拡がって、今日では大学グリークラブも他の団体も一節、四節を歌うならわしになっている。

つぎに曲であるが、カール・ウィルヘルム

によるドイツの名曲は、壮大なリズム感があつて、威風堂々としている。カープ先生が賛成されたように、青年にはうってつけの曲である。ただ、はじめから終りまで、同じような調子で、いたずらに勇壮にガンガン歌うのではなく、まん中の部分——Dear Alma Mater, Sons of thine……あたりはとくにやわらかく、うたうように歌い、漸次もりあげて、強く、堂々と歌ってゆくと、表現力は、いっそう豊かになると思う。それは昨春、縁あつてエール大学を訪問した際、向うの学生と共に校歌を歌ったことがあるが、歌詞は違つても、その豊富な曲想に、さすがは「エール」だと思つたことがある。その点、同志社の各学校は、愛校心に乏しいのではないか。歌い方のよしあしよりも、あたまたから校歌の説めない者や、歌えないものの方が多いようでは、何の同志社教育なのか、と反問したくなる。

歌詞も曲も優れているこのワンバースは、一人で歌うよりも大勢で歌う方が、いっそう校歌らしくなる。これが回を重ねて正しく美しく歌える同志が、百人、千人、

万人と集まつたら、私たちは、きつとこの歌の生命力に打たれるに違いない。同時に同志社は、新島在世当時のような活力をとりもどすことであらう。

(香里中・高嶺託講師・社会)



パリ・ユネスコ本部で考えること

岡 島 貞 一郎

(一)

私はパリのユネスコ本部に勤めております岡島です。本日は国際機関に働く者として、日ごろ感じていることをお告げにのべてみたいと思います。

いま国際機関は、世界に十四、五ありまして、国連本部とすべて提携し種々の専門分野を担当しております。そのうちユネスコは、教育・科学・文化コミュニケーションの四分野を担当しております。なおユネスコは一四〇数カ国で成り立っており、その運営のしかたとしては、メンバー国が二年に一度みな集まって総会を開き、そこで仕事内容を決定し、世界各国で事業を行うわけです。しかし総会開会前に、四〇ヶ国の政府代表からなる執行理事会があり、そこであらゆる問題が討議され総会にかけられるわけで

す。ここで討議される問題を整理し、論点を指摘して、ある程度将来の方向を示唆するのがユネスコ事務局の仕事であります。すなわち、ユネスコ事務局は、執行理事会や総会の準備をするとともに、世界各国における事業の執行をするのです。ここで働いている私たちは、ユネスコ加盟国から派遣されて参ります。その人員採用のしかたは変わっており、年度ごとの募集定員などはありません。ただユネスコを構成するポストが空くと、その旨総長名で各国政府に通達され、政府はその主旨に合った人物を推薦し、ユネスコで候補者を審査のうえ採用を決定するのです。

皆さんがユネスコで働きたいとしたならば、二つの方法があります。すなわち、一つは優秀な論文を書きユネスコ本部から要請がくるようにすることです。他の一つは国家上級公務員試験にパスして文部省か外務省に入り、チャン

スを待つことです。おそらく後者のほうが容易でしょう。さて、かかるプロセスを経て国際機関で働くということとは、北はソ連、南はアルゼンチンなどあらゆる国々からきた人々と働くことになるわけです。そこではフランス語と英語が日常語として用いられ、総会や理事会では、英・仏・スペイン・ロシア・アラビア・中国の各国語が公用語として用いられます。皆さんはぜひ、これらの外国語を二つ、あるいは一つでもよいからマスターして欲しいものですね。またユネスコ勤務員の各国別定数は、ある方程式にもとづいて決定されることになっております。しかし、実際にはフランス人が多く、ついでスイス人・イギリス人などが多い実態です。日本人は十数人働いております。一説によりますと、五〇数人の日本人勤務員採用も可能であるといわれております。それゆえ、ぜひ、同志社からもユネスコで働こうとする卒業生がでて欲しいものだと期待します。

(二)

つぎに、私が日ごろ国際機関で働いて感ずることを申し上げ、皆さんのご批判を仰ぎたいと思います。これは、いろいろの国の人々と多くの仕事をして得た感じであり、ほとんど確信になりつつあるものです。すなわち、私たちは、いったい何を学ばなければならないかということをよく考えさせられる機会が多いわけです。日ごろ観察いたしますに、一つの結論として、私たちは分析力を大いに磨か

なければならぬということを考えるに至ったわけです。分析力の有無が、人生を決定する重要な要素ではないでしょうか。あとは運命でありましょう。あらゆる社会やグループのなかにあって、どれほど自分が分析力において優れているかということを養うことがたいせつです。これがありませんと今後の社会には立つて行けません。どれほど適格に物事の事象を分析することができるとか。これが私にとってはいちばん大きな課題であるように思われます。

たとえば、皆さんのなかで経済学を学んでいる人は、経済現象をその学問をとおして分析されるでしょう。いま一九七七年十一月現在、一ドルが二四五円です。これにはどういう意味があるのでしょうか。円が高くなっているからだということだけはすぐにわかります。しかし、そのことが日本経済にとっていかなる意味があり、これからの日本はどのような方向で行くべきか、他国はどうであろうか、これらのことを分析する必要があるはずで。つぎに、日本とドイツを比較して考えてみましょう。敗戦後ドイツは一ドル四マルク四〇から出発し、日本は一ドル三六〇円でスタートしました。ところが三十有余年後の現在、ドイツでは一ドルが二マルク二〇、すなわちマルクの強さが二倍になっているわけです。それから計算すると、日独の経済環境は異なるとはいえ、同じ敗戦国で、戦後復興のため、似通った努力をしたのに、ドイツのマルクは二倍の強さを

持ち健全な経済活動を行える状態になっているわけです。

一方日本の場合、一ドル三六〇円で、それが二倍の強さになったとすれば一八〇円です。すなわちこの計算からみても、日本は一ドル二四五円で円は高いというが、果たして正しいといえるでしょうか。一八〇円ぐらいにあがったとしても不思議ではないとの見方もでてくるわけです。

さらに一例をつけ加えましょう。E・H・カーという歴史家が、『歴史とは何か』という名著をだしております。

そこでは、第一次大戦の原因は何かということを例としてつぎのように書いております。「ある学生が第一次世界大戦の原因は何かと問われ、『バルカンの一青年がオーストリアの皇太子に打ち込んだピストルの玉である。この鉛の塊こそが第一次世界大戦の原因である』、といったとしたら、その学生にはせいぜい十点ぐらいしかあげられぬだろう。すなわち、この学生に期待されていることは、どうしてこの小さな鉛の塊があのように悲惨な戦争をひき起こしたのかというその原因を分析することであつたのです。この事件がひき起こされた裏には、社会的不安、経済的不況、人種問題等々、ありとあらゆる原因が考えられます。しかし、それらをただ、ら列してもだめなので、社会的不安が先か、経済的不況が先かというのを秩序立って考え、第一次大戦の原因を究明するという態度が歴史を研究する立場でなければならぬといっているのですが、私はE・H・カーが非常に良いことを申していると思います。

すなわち、分析の問題です。

皆さんは、私も含めて、同志社内外、とにかくどの場にあつても分析する力を大いに練磨していただきたいし、そうでなければならぬと確信しておるわけです。皆さんは、当面特に学問を通じて分析力を徹底的に磨いて欲しいと思います。これは鍛練の問題であり、鍛練とは日ごろの姿勢の問題です。だから、たとえば日ごろの読書会なども、皆さんが分析する力を発揮する場所でありましょうから、大いに力を入れて体得してください。こうしたたゆまぬ努力を通じて分析力は伸びていくのではないのでしょうか。

以上が、まず第一に私が考えているところです。

第二に考えましたことは、表現する力・表現能力をたかめろということにあります。それは自分が分析したことを自分のなかだけに閉じ込めて置くのでなく、相手の人々にわかってもらえるように、表現する能力・技術を身につけなければならぬということです。私はこのことを痛感しておるものです。

私が学生のころも、よくつぎのようにいわれました。

「最近の若者はボキャブライがすくない。動物が叫んでいるのと同じだ。我々昔に学生時代を送つたものは、もつとボキャブライが豊富で、漢詩でも、和歌でも俳句でも、詩でも実にみごとな表現を使つた。しかし、現代の諸君は何であるか。」

表現する力が乏しいということでしょう。表現する方法

といたしましては、私たちの場合は二つでありまして、一つは話すこと、もう一つは書くということです。ある場合には歌うこともありましょうし、笑うことも、泣くこともありましょうが、だいたいにおいて、書くことと話すことです。果たして自分が話していることが相手にわかってもらっているかどうか、これは非常にたいせつなことでありまして、自分の発言内容が相手にわかってもらっていないくとも、どちらでもよいという人がときにはおりますが、私はそうしたことはあつてはならぬと思います。くり返し申すようですが、自分の話していることはなるべくわかって欲しいのです。しかもこの力は、私たちが日夜努力をいたしませんと身につかないものなのです。

ユネスコにはいろいろな国の人に来てまして、確かに分析をし、確かに表現をするわけですが、特にこうした国際機関におりますと、表現能力がない人は、よほど優秀な分析能力の持ち主であっても、何の意味もありません。それですから、自分の言おうとしていることを明快に相手に理解してもらおうという努力が必要であらうと思うのです。

(三)

以上にのべてきた二つの力、すなわち分析力と表現能力を養うことによって社会に貢献するとか、自分自身を発表するということは、いったい何を目的にしていることなのでしょう。私は出来る限りの「自己燃焼」の問題と考え

ます。

私は会社であらうが、家庭であらうが、組合であらうが、どのグループにあつても、同志社人は知的リーダーシップを発揮するという、一つの心構えをもっていきたいものだと思っております。金もない、家柄も悪い、顔形も醜くい、しかし、あの人たちには知的リーダーシップがあるという人の集団を同志社人と、その伝統にしたがつて呼びたいと思います。この伝統を継承することは、簡単なことではありません。他大学の人たちもおそらくこうしたことを考えているわけです。おもしろいところです。ただめめめしているだけでは知的リーダーシップを掌握するには至りません。いうなれば、いままで述べてまいりました二つの力がその基になるかと思ひます。続いて、グループや会議を主催する座長の役割を勤め得る能力もいかに大切であるかということを示したかったのでありますが、要は二つの力、分析する能力と表現する能力とを大いにたかめて行きたいものだと思うしだいでございます。

(昭和四十年経済学部卒、ユネスコ・)
パリ本部渉外総局勤務

本稿は、辻野功氏が担当する一般教育政治学の学生を対象にして岡島貞一郎氏が昨年十一月十八日に講演したテーマを香里中高教諭萩原俊彦氏が原稿化されたものである。

京都の三年

金 煥 泰

解説・訳 宇治 郷 毅

「郷愁」

東のかた野末はるか
昔の物語ささやく小川はめぐり
斑点のある牡牛が

雪解けに照りかえる金色の光あび
ものうげに啼くところ、

彼の地 など夢にだに忘れうべき

(以下四連省略)

とになった。

私が日本内地に留学したのは京都に三年、福岡に三年、前後六年間であった。その中でも京都時代の三年は、私の長い学窓時代を通じてもっとも愉快な時代であった。私はここに、その京都時代にあったことで追憶されるいくつかのことについて書いてみよう。

そのとき私は東京まで行く途中であったが、京都に私の故郷の親友KとYという人がおり、彼らを訪ねて二、三日休養するつもりでそこに降りた。ところがこの二人の友人と別れがたくなり、また典雅優雅な古都を立ち去りがたくもあり、ついに同志社大学予科に入学すること

入学してまもなく、在学生たちが新入生歓迎会を開いてくれ、その場で初めて詩人鄭芝溶氏に出会った。私は以前彼の詩を読んで、背がとりわけ高く、鼻が鋭く、実際に背だけは五尺三寸にもみただ、歯だけが人より長かった。その日は、童謡「帯」と「紅くうれた柿」を詠んだ。

その後ある季節、ひじょうに暗い晦日に、彼は私を相国寺の裏の墓地に連れていき、「郷愁」という詩を詠んでくれた。

この詩は私に限りない郷愁をよびおこした。そして彼は、郷愁にもだしがたくすぐ下宿に帰ることをいやがる私を連れて、四条のある喫茶店へ行かねばならなかった。そして私にカルピスを飲ましてくれたのであった。

またある初夏の夕暮れに、彼は私と鴨川の岸辺を歩きながら、「鴨川」という詩を詠んでくれた。

「鴨川」

鴨川十里の河原に
日が暮れる………暮れる

日ごと君を想いやり
のども潤れはてた……

早瀬のせせらぎ……

冷たい砂を握りしめる一人の男の心、
握りしめ、粉ごなにしてみ、
わたしの心は静まらない。

多年草のおい茂ったところ
川蟬が一羽棲みつき、鳴いている。

一つがいの燕が飛びたった、
まるで雨にうたれて踊りをおどってい
るようだ。

西瓜のにおいをはこぶ夕べの水上の風
オレンジの皮を噛むような
若い旅人の憂愁。

鴨川十里の河原に
日が暮れる……暮れる……

この詩が詠まれたその時間のその風景
の中で、作者自身の口からそれを聞くと
き、この詩がもたらす感銘はまことに味

わい深いものがあつた。かくして「鴨川」
は「郷愁」とともに鄭芝溶詩の中でもつ
とも私に親しみ深いものとなつた。

翌年の春に、彼は学生服を脱ぎすてて、
新調の紺の背広を着こなし、女王蜂
のように華やかに、帰郷してしまつた。
ボールのようにボンボンと跳ねて往来し
ていた彼の姿が教室から見えなくなつた
とき、私はしばらくの間とても寂しかつ
た。

一年をへる間に、P、K、Y、H、C
といういつもいっしょに遊ぶ親友ができ
た。

Pは年が三十歳をはるかにこえて、中
学校三年に通っていた老学生であつた。
しかし帽子はいつもかぶらず手に持って
歩いていたので、皆は彼を専門部学生と
思っていた。故郷においてきた妻と娘の
ことが思い出される日は、いつもわが
故郷を離れて……という歌をうたつ
た。

Kはある女性を片思いしていたが、中
学に十年も通いながらずっと三年生であ
つた。その間に、彼が片思いしていたそ

の女性はすでに専門部をおきて、同志社
大学法学部学生になつていた。彼はとき
どき色紙を切り取って他人の骸骨を作っ
ておき、我々をその鑑賞会に招待した。
そして我々がそれに最大級の感嘆詞を連
発しないかぎり満足しないくせがあつ
た。彼は人の引越しを手伝うのが好き
で、また川むこうの古里には煙もたつ
ず、汽笛もやんだ……という歌をう
たうのを好んだ。

Yは我々のグループの中では、もつと
もおとなしく、まじめな模範学生であつ
た。新聞配達や家庭教師をしながら苦学
していたが、私は彼が不平を言うのを一
度も聞いたことはなかつた。また彼の顔
に怒りの色が浮かんでいるのを見たこと
もなかつた。そして神経質な我々から、
鈍感で動作がにぶいとそしりを受けるこ
とが多かつたが、そんなときも彼はにこ
つと笑つてすましてしまつた。しかし酒
を飲めば、箸でお膳の端をたたきながら、
喉からしぼり出すようなソプラノで、若
者よ進め、前へ進め……という歌を
うたつた。

「Hもまた年が三十をこえて、なお青雲の志をだいて玄海灘を越えて来た。新聞配達をしながら苦学していたが、不平と不満が胸の中にうずまくことも多かったようだ。しかしそれを口に出すこともなく、また笑いはしやいで冗談を言うこともなかった。そして我々が各自好きな歌をうたい、大きな声でコーラスを始めたり、あるいは意味のない雑談がますます卑猥で陰險なところに及ぶと、「エイッ馬鹿野郎め」とどなって外へとび出していった。

彼はヒゲが濃く、初めて見る人にはひどく恐くてぶあいそうな印象を与えることが多かったが、つきあえばつきあうほど人情味の深い人であった。歌は我々の中で一番うまかったが、めったに人前でそれをひろうすることはなかった。

Cはニヒリストというか、厭人病者であった。したがって彼の行動も我々の推測の域をこえていた。いっしょに話をしているも、何か気にいらないことがあれば急に立ちあがって出ていってしまった。そして、いっしょに道を歩いていて

も何も言わずに行方不明になることが多かった。彼はそのころ毎月家から五、六十円の送金があったが、我々は彼が金でどこで全部使ってしまうのか、彼のポケットに金が入っているのを見たことがなかった。彼はタバコがなくなるときまってKを尋ねて来て、「タバコがなくなつたよ。」と云つてはKの様子をうかがつた。そうするとKは「知らん。俺も昨日から喫っていないよ。」とボンとはねつけた。しかしいつの間にかこっそりどこかへ出かけていき、必ず「バット」を一箱もって返ってきた。するとCは急に生き返つたようになり、藤原義江のまねをしてあやしい身ぶりで、「磯の鳥や、日暮れにや帰る……」と喉をふりしほつて歌つた。

このように我々のグループは皆が特異な性格をもっていた。にもかかわらず、どこかお互い気が合うところがあつて、一日でも会わなければがまんできなかった。といつても、気が合わなければ一、二ヶ月も会わないこともあつた。しかしどちらか一方が、お前、やる気ならその

ようにやっておれ、と声をかければ、よし、やってみよう、と返事がかえつてきたが、その次には、お前、ちよつと面を見せてみる、「ばかやろう、お前の方こそいい面してるじゃないか。」と言葉が二、三回往復すると、ハッ、ハッ、ハッ、と笑つてしまった。

あまりに友人たちについての話が長くなりすぎた。しかし私の京都時代の思い出は、どの一つをとつてみてもこの友人たちと結びつかないものはない。嵐山の桜見物に行ったのも彼らとであつた。わが故郷を離れて他郷へ来て……、という歌を合唱して、隣家の娘さんたちの拍手かっさいをあげたのも彼らとであつた。米粉を人参粉とウソをつき、目の悪い下宿の主人をだまして、モッタイナイ、モッタイナイ、と泣を流すようなふりをしてみせたのはPと私のイタズラであつた。二階で相撲をとつて、下宿のおかみさんをして家が倒れるとびっくりさせたのも、Hと私とであつた。夜中に二階から小便をして、前の庭が川のようになつたのを見て驚いた主人に、お茶を

捨てたのでそんなになったんです」と汗をかきかき弁解したのもYとHであった。夜が明けるまで私と文学談をしたのはCであった。わが初恋の苦しさを理解してくれ、慰めてくれたのはKであった。三年たった年の春に、Kが片思いしていた某嬢と、私に初めて恋の苦しさを教えてくれた某嬢が帰郷してしまった。我々は鴨川の土手に横たわり、一日中、愛、人生、そして故郷の人たちについて語り合い、互いに慰めあった。

その年一年はこの仲間たちとつきあいつつも楽しかったが、また一方孤独で寂しい気持ちをおさえることができなかった。

そしてその年の冬に、KとCと私と三人が春になれば東京へ行こうと話し合った。しかし何となく計画がこじれて、Kだけ東京へ行き、CはY、Hと京都にそのまま居すわり、私は福岡へ行くことになった。そしてお互いが別れるときに、誰かが、いつまた皆が同じ場所に集まれるようになるかわからないなあ」と悲しがるのを、ぎっとまた会える日があ

るよ」と皆が自信ありげに答えた。しかし今にいたるまで、いつ一箇所に集まれるようになるのか見当がつかない。かりにそうなったとしても、その時には我々を悲しませる一つの事件が生じていた。それはYが昨年のいまごろこの世を去ったことである。彼は中学一年に入学したときから、ずっと苦学した学生であったのだが……。

〔解説〕

金煥泰キム・ファン・テ（一九〇九年—一九四四年）は朝鮮全羅北道茂朱郡に生まれ、全州高普、及びソウルの普成高普を卒業し、一九二八年、十九歳のとき、日本へ留学した。京都の同志社大学予科に三年、福岡の九州帝大英文科に三カ年学んだ。卒業後、黄海道載寧の明新高普、ソウルの舞鶴高女に教鞭をとったこともあったが、もっぱら文学評論家として身を立たした。彼は日本統治下、一九三〇年代の朝鮮で、近代的文学評論の確立のために苦闘した数少ない評論家の一人であった。

一九二〇年代朝鮮において強力に展開

された階級主義文学運動と民族主義文学運動は、一九三〇年代に入ると日本帝国主義の苛酷な弾圧によってしだいに弱体化していった。すなわち、一九三一年と一九三四年の第一次、および第二次カッブ（朝鮮無産階級芸術家同盟）検挙事件と、一九三一年の新幹会（民族派）解散事件がそれである。このような情勢の中で、この二つの潮流に代わって台頭し、一時期を画したのが「詩文学派」、「海外文学派」、「九人会」などのいわゆる純文学運動であった。金煥泰は「九人会」（鄭芝溶、李泰俊など九人の同人で構成された）の同人として、プロレタリア文学理論を批判しながら、芸術至上主義的な純粹文学批評を標榜した。活発な評論活動を展開したが、彼の代表論文は、一九三六年四月、『朝鮮中央日報』に発表した「批評文学の確立のために」というものである。しかし彼の活躍時期はあまりにも短かく、一九三四年から一九四〇年のわずか七年間にすぎなかった。

一九四一年以後は、日本の朝鮮民族文化まっ殺政策によって、いわゆる「皇道

主義文学（親日文学）を除くあらゆる文学運動がいえ去った。金煥泰もまた日帝末期、思想関係事件で一カ月収監された。晩年の彼は田舎に隠棲し、病苦と生活苦にさいなまれながら、三十代の半ばにしてこの世を去った。薄命ではあったが、激しく燃えた生涯であった。一九七二年、令息金榮珍氏によって、『金煥泰全集』（現代文学社）が刊行された。

ここに紹介する「京都の三年」なる文章は、彼がもともと夢多き青春時代を過ごした京都同志社時代の回想記である。

彼は一九二八年四月から一九三一年三月まで、大学予科に在籍した。後年京都時代をふりかえって、当時朝鮮で発行されていた総合雑誌『朝光』（二巻八号、一九三六年）に発表したものである。雑誌目次欄には、「異域学窓時代の追憶」と副題がつけられている。この回想記は彼の人間形成と文学修業の軌跡を知ることのできる数少ない伝記的資料の一つでもあるが、また同時に当時の朝鮮人留学生の生活と思想の一端をうかがうことのできる貴重な資料でもあると考えられる。

この回想記の中で、金煥泰は詩人鄭芝溶^{チョンジン}について述べている。この鄭芝溶という人も朝鮮では有名な詩人であり、同志社大学予科（一九二二―一九二六）、大学英文科（一九二六―一九二九）に学んだ人である。在学中から詩作に専念し、『同志社文学』（第三号、一九二八年十月）に「馬」という詩をのこしているほどである。この回想記にてくる詩「郷愁」と

「鴨川」は、彼の処女詩集『鄭芝溶詩集』（詩文学社、一九三五年）に収められている。またほかに彼の代表的詩集として、『白鹿潭』（文章社、一九四一年）がある。彼は朝鮮戦争時、共和国のほうへ行ったいわゆる越北作家の一人であり、今まで韓国においては不当に過少評価されてきた。しかし最近の韓国文芸界で、それらの越北作家の再検討、再評価の問題がとりあげられているのが注目される。金煥泰も文学思想面で彼から相当つよい影響をうけたようで、後年「鄭芝溶論」（『三千里文学』第三輯、一九三八年四月）を書いている。この朝鮮近代文学史に大きな足跡を残した二人の文学者が、その若き日

に望郷の思いに胸をふるわせながら、相国寺畔や鴨川の岸辺で詩をうたいあう姿を想像するとき、まことに感銘深いものがある。

ところで、当時の朝鮮人留学生一般の生活と心境はいかなるものであったか。彼らが玄海灘を越えて、異域日本に留学してくることは、彼らにとってどのような意味をもち、また我々日本人にとってどのような意味をもっていたのであろうか。この回想記からも読みとれるように、そこには日本人学生と共通した青春に普遍なものもあるが、彼らがおかれた社会的位置からくる特殊な問題もはらんでいたのである。たとえば彼らをつよくとらえていた郷愁は、たんなる故郷に対するノスタルジアではなく、亡国の恨みにつながるものではなかったか。また彼らをとらえていた孤独と不安も、日本人学生のそれとは質的に異なっていたと思われる。

最後に一つ翻訳しながらつよく感じたことを述べよう。それはこの回想記が、徹底徹尾、朝鮮人留学生仲間とのなつか

しく、楽しい思い出（それがたとえ不安と苦渋にみちた留学生活の中のものであっても）に終始していることである。奇妙なほど、同志社のこと、日本人教師、学生との交流について語られていない。はたして書くべきことがなかったのであるうか。私にはそうは思えないのである。

私には、金煥泰は日本および日本人について、語るべき多くのことをもっていたが、ここでは意識的に語っていないように思えるのである。中国人魯迅が「藤野先生」を書くことによって、自己と日本人（人）との距離と位置を確認したように、彼は書かないことによって自己の位置を暗示しているようである。ともに、日本人の立場からみると、深刻な意味をはらんでいるように思われる。

（参考文献）

李軒求「信念として文学を守護した金煥泰」

『現代文学』一九六三年二月

尹英一「金煥泰論―その純粹批評を中心として―」『国語国文学研究』一九六四年九月

金允植「訥人金煥泰研究」『ソウル大教養

学部論文集』一九六九年四月

金容誠『韓国現代文学史探訪』国民書館、

一九七三年

（訳者―昭和四十三年大学院法学
研究科修了、国立国会図書館勤務）

